P-63

# 大学生における視能訓練士の認知度調査

新潟医療福祉大学視機能科学科・森田有子
前田史篤，阿部春樹

## 【背景】

高齢社会の到来とともに加齢による眼疾患が増加している．さらに眼科医療が高度化し，視機能評価と管理の専門家である視能訓練士の需要が高まっている．阿部[1]は新潟県および近隣7県の眼科医療施設に対して視能訓練士の人材受給アンケートを実施し，理想とする視能訓練士の数3.1人に対して，実際に勤務している数は1.9人で視能訓練士の数が不足していることを明らかにした．野原ら[2]による岐阜県の調査では，県内の多くの眼科医療機関が視能訓練士の雇用を希望しているにも関わらず，同県の養成校は定員割れとなり，その求人に応えることができていない現状を示した．これらは視能訓練士の認知度が低いことが要因として考えられる．そのため，本研究では視能訓練士の認知度を明らかにするためにアンケート調査を行った．

## 【方法】

調査方法は無記名のWebアンケートとし，A大学の学部学生にE-mailで依頼した．回答期間は2014年7月2日から6日までの5日間であった．アンケートの作成および集計にはグーグルフォームを利用した．

アンケート項目は佐藤ら[3]の報告を参考にして作成し，1.性別 2.所属学科 3.学年 4.知っている専門職【図1にある医療および介護・社会福祉系専門資格から選択】(重複回答可)，5.［視能訓練士を知っている人に］視能訓練士を知ったきっかけ【テレビ，雑誌，インターネット，家族，学校で知った等から選択】(重複回答可）とした．

5日間で270名の回答を得た．バイアスを避けるため視能訓練士の養成学科に所属する学生の回答をデータから除外し，残った243名の回答を分析の対象とした．

## 【結果】

分析対象の243名に対する性別の内訳は，女性162名，男性81名であった．学年は1年次73名，2年次67名，3年次47名，4年次56名，所属学科については特定の学科に偏っていなかった．図1に専門職別の認知度を示した．最も認知度が高かったのは医師の97.5%，次いで看護師が97.1%であった．その他，歯科医師，栄養士，理学療法士，保育士，作業療法士が9割を超える認知度を示した．一方，視能訓練士については51.9%であり，約5割の認知度であった．視能訓練士を知ったきっかけで最も多かったのは【学校で知った】の39件であった（有効回答数99件）．

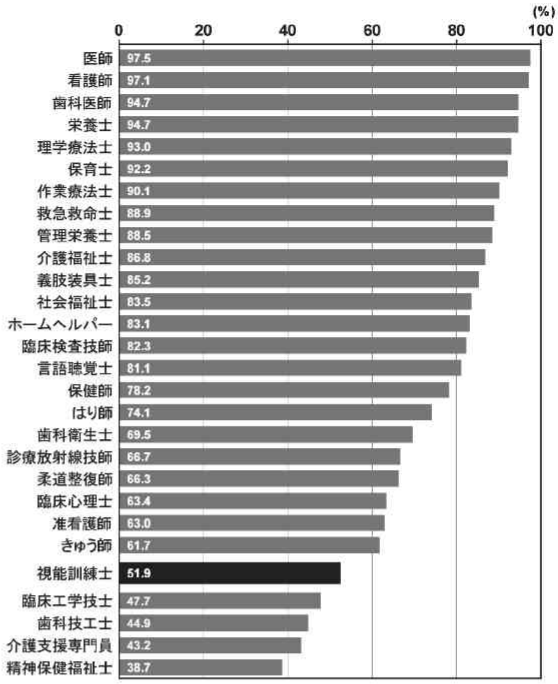


図1．A大学学生に対する医療および介護・社会福祉系専門資格の認知度（n=243）．

## 【考察】

佐藤ら[3]の調査によると視能訓練士の認知度は5.7%であった．我々のデータでは51.9%の認知度であり，両者には有意差があった（$p<0.01$）．これはA大学が視能訓練士を養成する学科を有していることや保健・医療・福祉・スポーツ系の大学であることが影響したものと推測された．また，学校以外で視能訓練士を知ったとする回答は少なく，実際の認知度は決して高くないことが推測される．

視能訓練士の認知度の向上は，視能訓練士養成校の学生確保[2]や三歳児健康診査への視能訓練士の介入につながることが期待されている．認知度を高めるべく，より一層の多角的な広報活動が必要であると思われる．

## 【結論】

A大学の学生における視能訓練士の認知度は51.9%であった．視能訓練士の認知度の向上のために，より一層の多角的な広報活動が必要である．

## 【文献】

1) 阿部春樹：眼科医療と視能訓練士～現状と将来展望～．日眼会誌 2013；117：957-958.
2) 野原尚美，他：岐阜県における視能訓練士雇用への意識調査－岐阜県眼科医会会員へのアンケート結果－．日視会誌 2010；39：207-215.
3) 佐藤法仁，他：医療および介護・社会福祉系専門資格の認知度に関する研究－研修歯科医師と非医療系大学生との比較－．医学と生物学 2009；153：540-544.